

アレクサンダー・フォン・フンボルトとフランス啓蒙思想家

市川 慎一

「自然はくめどもつきぬ研究の宝庫である。諸科学の領域が広がるにつれ、新たな問いを投げかける者に対して自然はそれまで全く考究されなかったような姿を見せてくれる」
アレクサンダー・フォン・フンボルト

はじめに

わが国では、すぐれた言語学者カール＝ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767-1835）が言語学界で占める位置と比べるとその実弟アレクサンダー・フォン・フンボルト（1769-1859）〔以下、単にフンボルトと記す場合は A.v.Humboldt を指す〕の名を知る人は多いとはいえ、ましてや彼が残した輝かしい科学上の業績が十分に評価されてきたとはいいがたいのではないだろうか。

『岩波哲学・思想辞典』（1998年刊）の項目「アレクサンダー・フォン・フンボルト」では次のように記されている。

「1769-1859. W.v.フンボルトの弟。ゲッチンゲン大学に学ぶ。1779年から1804年にかけて南米の主として赤道に近い部分を探検。オリノコ川の水路の確定。チンボラッソ山の高さの測定をはじめ、当時の最先端の精密機械を使って地理学的調査を行う。そうした測量機器および探検費用、さらに帰国後30年にわたってパリでフランス語で纏めた膨大な報告の出版費用はすべて私財をなげうって出した。パリ滞在中はナポレオン時代を含み、その頃フランスの「アルクイユ会」の科学者たちとも交流があった。「南米の科学的発見者」と言われる彼は、またペルーの湖の水量の減少が人間活動の結果であることなどを調べ、エコロジーの先駆的業績も上げている。特に晩年の1845年から62年にかけての『コスモス』は、当時次第に時代遅れになりつつあった総合的な記述によって生きた自然に迫ろうとした著作である。政治的にも鋭敏で、メキシコの自由のために弁じるとともに、ドイツに戻ってからはプロイセンの学術政策に対する影響力を利用して、政治的抑圧に苦しむ若い学者に援助をさしのべたりもした。自然を論じた、晩年のゲーテとの往復書簡は新しい時代への嫌悪を共有している点でも重要。

【文献】A.v. Humboldt, *Voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent, 1811-26.*
[三島憲一]⁽¹⁾

末尾の【文献】にあがっている主著の邦訳[ただし全訳ではない]がその後『新大陸赤道地方紀行』(全三巻2001-2003年刊)⁽²⁾と題されて刊行されたことを除けば、事典の短かな項目の中で、アレクサンダー・フォン・フンボルトの主要な業績が要領良くまとめられていて、彼の全体像について付言すべきものはないようだ。

とはいえ、どの事典についても事情は同じなのだが、各項目の字数が限られているので、執筆担当者が省いた部分が出てくるのはやむえないことであろう。

わたしは十八世紀のフランス思想に多大の関心をよせ、それと同時にA.v.フンボルトと新大陸との関係にも興味をいだく者として、フランスの啓蒙思想家とフンボルトの関係に以下の紙面で前掲の事典項目を若干補完してみたい。

フランス啓蒙思想家から学んだA.v.フンボルト

以下の紙面ではフンボルトと十八世紀のフランス啓蒙思想家との関係に焦点をしぼるが、その関係が比較的薄いと思われるヴォルテール(1694-1778)からはじめて、彼との深遠な関係を看過できないと考えられるビュフォン、さらにはディドロの順で論を進めて行きたい。

まず一番バッターとしてヴォルテールに登場してもらおうが、実はフンボルトはヴォルテールとも無縁ではなかったのだ。

1) ヴォルテールとその歴史観

A.v.フンボルトの膨大な著作の中では具体的にヴォルテールの名をあげた箇所はみあたらないようである。フランス語で書かれた研究書でシャルル・マンゲが指摘するように、フンボルトは明らかにヴォルテールを踏まえているような時でも彼の名前を出していない。

たとえば、スペイン領アメリカでは「あるできごとを三世紀まで、つまり[新大陸]発見の時代まで遡れば、この上なく古いように思われている。」それに反して、「中国や日本では二千年前から知られている発明も最近の発明とみなされている」⁽³⁾とマンゲは指摘したが、フンボルトのこのような歴史観はヴォルテールのそれに限りなく近い。前引の『新大陸赤道地方紀行』上巻の末尾に収録されたエンゲルハルト・ヴァイグルの解説でも述べられているように、「なんといってもフンボルトの歴史観はフランス啓蒙の文明モデルに支えられていた。つまり、文化の成果を測る物差しは、文書、暦、数学、そして「巨大な記念碑的建造物」ということになる」⁽⁴⁾。

ヴォルテールは名著『習俗試論』(1756年)において、中国人は天文学と文字によってあらゆる記録を残した点を再三強調していたのをここで想起しておきたい。ヴォルテールはいう。

「確実性のある若干の年代記があるとすれば、天体の歴史を地上の歴史に結合させた中国人の年代記である。あらゆる民族のうちで彼らだけが天体の食と惑星の合とによって彼らの時代を絶えず記してきた。彼らの計算を調べたわれわれの天文学者は計算がほぼすべて真実であることがわかって驚いた。他の国民は寓話的作り話をでっちあげてきたが、中国人は他のアジア諸国に例をみない単純さでもって、ペンと天体観測儀を手に彼らの歴史を書いた⁽⁵⁾。」

ヴォルテールとの関連ではもう一点指摘できよう。新大陸赤道地方の現実をつぶさに見たフンボルトをもっとも慨嘆させたことは、ヨーロッパ人による先住民の酷使、さらには奴隷売買の問題だった。わたしはこれらの問題に対するフンボルトの見解をすでに指摘したことがある⁽⁶⁾が、彼は奴隷制廃止論者として一貫して奴隷の支配者たちに容赦のない弾劾をその旅行記の随所で表明した。

周知のように、ヴォルテールも名作『カンディッド』(1759年)の第十九章に登場する黒人奴隷にこう言わせている。

「[...]着る物は一年に二度、麻の短いズボンをいただくだけ。製糖工場で働いて指が挽き臼に引っかかりでもすると、わしらは手を切り落とされる。逃げ出そうとすると、足を切り落とされる。わしは両方の場合に当てはまった。そんな犠牲と引き換えに、あなた方はヨーロッパで砂糖を食ってられるわけでして [...]」⁽⁷⁾。

よく知られたことであるが、ヨーロッパの社交界で人々がコーヒーと砂糖を消費できた背景には新大陸における白人による奴隷たちの搾取があったからだった。フンボルトがヴォルテールの『カンディッド』を読んでいたかどうかは未詳であるが、奴隷たちに注がれるフンボルトの同情はヴォルテールのそれとまったく異なるところがないといえるだろう。その歴史的文脈において彼がヴォルテールを読んだかどうかは大きな問題ではなく、両人はほぼ同じ視点からヨーロッパ人の植民問題の一端を考察していたことをここでは重視すべきであろう。

2) ジャン=ジャック・ルソーと《善良な未開人》神話

フランスにおいて《善良な未開人》神話はモンテーニュの『エッセー』に含まれる食人種(第31章)執筆の頃から脚光を浴びることになり、十七世紀には、イエズス会の宣教師がアメリカの先住民のうちに古代の羊飼いにみられる純真無垢と習俗の素朴さを見出したといわれ、十八世紀に至ると、この神話はルソーの『不平等起原論』において一応の頂点に達した観がある⁽⁸⁾。

周知のように、ルソーは彼の考える《墮落した文明人》(ヨーロッパ人)と対峙させるために、

《善良な未開人》(自然人)の美質をことさら強調するわけだが、彼が情報を得ていた旅行者、宣教師らの報告等をそのまま信じていたわけではなかったようだ。

ジルベール・シナールが名著『アメリカとエキゾチックな夢』(1934年刊)において指摘しているように、ルソーは幼年時代から新世界の書物を読んでいたらしく、《お前のもの、わたしのもの》という私有の起源も当時どの旅行記にも出ていたことであり、社会状態に先行する《自然状態》という発想もルソーの発見ではなかったとされる⁽⁹⁾。

ルソー以前の作家たちは、未開人が仕合せなのは、キリスト教の原罪という観念がないからだと主として説明していたわけだが、十八世紀に至るとこの説明だけでは不十分で、未開人が自給自足のできる一種の共同体のうちで生活しているという新しい視点が注目されはじめた。この点が、ルソーの第二論文で展開される説とあいまって、《善良な未開人》神話に有力な根拠を与えることになったといえよう。

ところでここで急いで注意しておかねばならないのは、歴史的考察を試みようとする場合、ルソーは一切の歴史的事実を無視し、彼の方法論は「憶説的で条件的な推論」で展開されているということなのだ。『不平等起原論』の冒頭でルソーは次のように述べている。

「それゆえ、まずすべての事実を捨ててかかろう。なぜなら事実は問題に少しも関係がないのだから。われわれがこの主題に関していかなる研究にはいりこもうと、それは歴史的真理ではなく、ただ憶説的で条件的な推論だと思わなければならない⁽¹⁰⁾。」

ルソー自身が己の発想法をこのように明快に述べているのだから、北米における《善良な未開人》(自然人)神話はルソーが自説の展開にふさわしい神話を創造しただけのことであって、彼自身は想像上の「未開人」[=自然人]の存在を信じていなかったことは明白であろう。

和辻哲郎も『倫理学』の中でルソーの自然人にふれ、「[...]ルソーの考えたような孤立的利己的な自然人などというものも、全然非現実な抽象物にすぎない⁽¹¹⁾」と指摘し、その存在を一蹴した。

ここで、ルソーとフンボルトの関係に限れば、前者にあってはあくまで新大陸における想像上の「未開人」[=自然人]を取り上げていただけなので、新世界の現実を見たフンボルトによりそのルソー神話のもろくも否定されてしまうのだ。

3) 探検博物学の先駆者たち(ラ・コンダミーヌ、ビュフォン)と新大陸

周知のように、フンボルト以前には、フランスからはラ・コンダミーヌ La Condamine (1701-1774)らが学術調査のため新大陸へ派遣されたことがあったが、フンボルトはそれらの先駆者の業績にたいする敬意を忘れることはなかった。彼に先行してアマゾン川の計測をしたド・ラ・コ

ンダミーヌやアンヴィルらの探検成果に言及しているし、フンボルトは次のように述べて、先駆者の仕事を讃えている。

「アクニャ、フリッツ師、ラ・コンダミーヌらが蒐集した、ウアウペスの南北における金の洗鉢場に関する情報は、私がこの地方で金を含有する地層について知りえた情報と一致している⁽¹²⁾。」

フランスにおける博物学の大先駆者、ビュフォンについては、フンボルトは一世紀前のこの大博物学者の研究結果を越えようとしていたことはあきらかのように思われる。

新大陸を一度も訪れることのなかったビュフォンの見解にフンボルトは実際にアメリカで目にした光景を引きあいに出し、ビュフォン説の訂正も試みている。たとえば、フンボルトは次のように指摘する。

「ビュフォンがアメリカ最大の猫科をまったく認めなかったことを今日では博物学者は知っている。新大陸の猫科の虎の臆病さについてこの著名な作家が述べたことはオセロット（アメリカ最大の山猫）にかんじたことである。オレノコ地方ではアメリカ産の本当のジャガーは時として水中に飛び込み、丸木舟に乗るインディオたちを襲うこともあるのだ⁽¹³⁾。」

さらに、ビュフォンは未見のアメリカにかんして一時、珍説を発表したことで知られているが、フンボルトはやんわりと先駆者ビュフォン説の訂正もおこなっている。

ビュフォンは『博物誌』の《両大陸に共通する動物》（1764年）において、こんなことを指摘していた。

——アメリカにおいてはヨーロッパから移送された四足動物等が小型化してしまうばかりでなく、体力も減退し、生殖能力も退化するとビュフォンは主張した。

このビュフォン説に悪乗りした人物のひとりにコルネリウス・ド・ポウがいて、『アメリカ人にかんする哲学的探求』（1768年/1770年）において、次のように述べていた。

——「ヨーロッパ、アジアからアメリカに移送した動物は小型になる。駱駝は子孫を残せない⁽¹⁴⁾」と。

これらの珍説にたいして、フンボルトは旧大陸から新大陸へ移植された動物が矮小化するとし

た説をナンセンスと斥けた。

「アメリカのすべての言語のいわゆる貧弱さや数価システムの極端な不完全性にかんして若干の学者が主張したことは、新大陸における人類の愚かさ、生物界の小型化および北半球から南半球に移送された動物の退化にかんする説と同じくらい大胆極まりないことなのである⁽¹⁵⁾。」

最後に、フランスのフンボルト研究者、シャルル・マンゲによれば、フンボルトの見解にはビュフォンや百科全書派の影響が見られるとして、次のように指摘した。

「時の経過とともに進展し、変転するひとつの全体という想念——ラマルクをして生物変移説に導くはずの想念——は単純なものから複雑なものへの漸進的移行という概念に連結する。この想念はすでにビュフォンとモペルティユに見出させた。ヴァルローはひとつの全体というこの大きな想念がディドロとビュフォンによって再度取り上げられたと強調するがもっともなことだ⁽¹⁶⁾。」

さらにフランス百科全書派のディドロはこのような思想をさらに発展させたドイツ啓蒙主義のゲーテらからフンボルトは大きな影響をうけている、とマンゲは述べている。ただ彼が初版の注で強調した見解がどういふわけか再版では再録されていない。

4) ディドロとその自然観

以上のようなシャルル・マンゲの見解の是非をここで詳細に検討するには、それはあまりにも大きなテーマすぎるのでこの小論では立ち入らないことにするが、ディドロらフランス啓蒙思想家とフンボルトの自然観には共通する想念がいくつも見出せるのである。

そこでここではわたしの見解と通底する多くの卓見を表明したマンゲ以外の研究論文の趣旨を検討しつつ、ディドロらとフンボルトとの関係を考察してみたい。その論文とは、2003年に、フンボルトのメキシコ到着を記念し、大展示会が開催された際刊行された図録「アレクサンダー・フォン・フンボルト——新世界観——」⁽¹⁷⁾ に収録されたふたつの論考を指す。

図録に掲載された論文は十数点に及び、いずれも読みごたえのある論考が含まれているが、ここでは図録全体の巻頭を飾るにふさわしいフランク・ホール「アレクサンダー・フォン・フンボルト再考」と彼の方法論を論じたハイメ・ラバステイド「フンボルト：その世界観」⁽¹⁸⁾ の骨子を紹介してみたい。

F.ホールはフンボルトが新大陸探検で明らかにしたかったのは、「人間と自然の調和的な相関

関係」であるとし、自然の力関係、つまり、動物・植物の生きた自然の死んだ自然への影響の解明に挑んだわけだから、現在の用語でいえば、エコロジー（生態学）の先駆的研究者として彼の業績をたかく評価する。

たとえば、いまでは生物多様性 biodiversidad の問題といえようが、『赤道地方紀行』においては、ベネズエラのバレンシアでは、密林の破壊（樹木の伐採）がやがてこの地方にふたつの災害、つまり、木材と水の欠乏をもたらすとフンボルトは予想した。

オノリコ川のウルアーナ島では、イエズス会士によるカメの卵の採取には一定の基準が設けられていたが、後続のサン・フランシスコ会士は浜辺全体を掘り起こしてしまい、年々卵の収穫が減少している、とフンボルトは指摘する。

フンボルトは、自然にあっては、単独の現象というものはひとつもなく、共通のきずながすべての有機的自然を連結している、と考えている。つまり、「すべては相互作用」である、とフンボルトは喝破するのだ。

こうなると、フンボルトの自然観はビュフォンの自然観をうけて、自然は鉱物界、植物界、動物界の大きな連鎖でなりたっていて、すべては絶えざる生成の過程にあるとしたディドロの自然観にかぎりなく近くなってくる。

ディドロは『自然の解釈にかんする思索』（1753年）の中でいう。

「もし諸現象が相互に結ばれていなかったら、哲学はない。よしんば諸現象はすべて結合されていたとしても、現象の各々の状態は恒常性を欠いていることもありうるかもしれない。もしも種々の存在の状態が絶えざる変転の中にあり、いろんな現象を結びつける鎖があるにもかかわらず自然がまだ作業中であるとしたら、哲学はもはやありえない。われわれの自然科学全体は言葉同様、過渡的なものとなる。われわれが自然の歴史〔博物学〕と解しているものは、一瞬間のきわめて不完全な歴史にすぎない。それゆえ私は問う。金属はそれが現在あるがままのものであったし、永遠にそうであるだろうか、植物はそれが現在あるがままのものであったし、永遠にそうであるだろうか、動物は現在それがあがあるがままのものであったし、永遠にそうであるだろうか、等々と[...]。」

ディドロは続きの段落で次のようにもいう。

「動物界と植物界におけるのと同じく、一つの個はいわばはじまり、成長し、持続し、衰え、死ぬのと同様に、種全体にかんしても同じことが言えないだろうか⁽¹⁹⁾。」

このように、ディドロは自然界の万物は絶えざる生成状態にある、と考えた。

したがって、鉱物界、植物界、動物界は連鎖しており、そこには神の入る余地は残されていない。こうしてディドロ自身は十八世紀においてはきわめてラディカルな唯物論（一元論）に到達していくのである。

前引の論考において、F.ホールは、フンボルトの思想をディドロのような唯物論に結びつけることをしていないが、最晩年に執筆した大著『コスモス』において、フランス啓蒙思想とフランス革命に学んだフンボルトは、すべての文化、宗教、人種を尊重して、「人類はひとつ」という思想に達していた、と結論した。

次に、ハイメ・ラバステイド「フンボルト：その世界観」の中身を急いでのぞいてみよう。

ラバステイドによれば、『新大陸赤道地方紀行』（以下、『赤道紀行』と略記する）に見られるフンボルトの方法論は全体論 *holistico*（フランス語では *holistique*[*holisme*]）である。すなわち、全体、特に有機体の特性は部分の総和に還元できないとする学説であるとした。

『赤道紀行』にかんしてラバステイドの見るところでは、フンボルトは発話の主体であるとともに、語りのフィクションの人物でもある。彼は自然の景観に熱中し、不当だと見なす社会の変革を望んでいた、とした。

さらに、学問上ではフランスの友人、アラゴ、ゲ=リュサック、ラプラスと同じく、近代科学の厳密な環境でフンボルトが教育を受けた点をラバステイドは強調する。

フンボルトの近代的科学の論述主体は合理的主体と考えられ、彼が使用した科学上の道具は彼の感覚器官や知性の延長と見なして、自然の力の多様な認識の伸張をはかった、と考えられている。

ラバステイドの論文で注目すべき指摘は、フンボルトの自然認識はガリレオ、デカルト、ニュートンのように、数学的言語で世界を機械論的に把握するのではなく、換言すれば、デカルトのように「運動は単純なものに還元される」と考えるのではなく、ディドロらのように運動は機械的な法則に還元できない、とした点にあるという。ラバステイド論文の主張は、ライブニッツ、ディドロやフンボルトは還元論者ではなかったという点に尽きると思われる。

なお、フンボルトの自然認識の根底には均整の概念があり、多種多様な攪乱がおこるにもかかわらず「コスモスは均整がとれたままであり、攪乱は一時的なものである」と考えていた、とラバステイドは指摘した。

最後に、これはラバステイドの主張ではないが、フンボルトとディドロとの関係については、前者が後者の書物に目を通していかいなかを問うよりも、フンボルトの業績は天文学、地理学、地図学、植物学、動物学、歴史学、物理学、薬理学、博物学、経済学、統計学問等を総合した研究、すなわち、現在の用語でいうところのまさに学際的研究であった点をここで強調する必要がある。というのもフンボルトが現地でおこなった観察には、ディドロが聞けば喜びそうな個所を『新大陸赤道地方紀行』の随所で拾うことができるからである。

「[...]ティエラ・フィルメにおける地震及び小アンティル諸島の火山に関する議論において、[...]まず多くの個別の事象を報告し、次にそれらを含めて考察した。その結果、地球の内部では、互いに反応しあい、拮抗し、変化する活発な種々の力が作用してしていることが明らかになった。これらの波動や、熱の放射、弾性流体の形成などの原因について不明であればあるほどに、きわめて遠隔の地でもこれらの現象が一様に示す諸関係を研究することは自然学者の責務であろう⁽²⁰⁾。」

一方のディドロについて、わたしはかつて彼を「百科全書的人間」と称したことがある。すぐれた学者同士の研究道程でよくおこるように、このようなふたりが相互補完しあうのはまさに当然であったというべきであろう。

「結語」にかえて

当時の欧米においてもっともヨーロッパ的な思考の持ち主と目されたゲーテはイタリアを含めたヨーロッパ圏内での博物学研究に没頭したが、フンボルトはフランス啓蒙思想家やゲーテらが実際訪れることのなかった新大陸の探検を実行し、未知の大陸の現実をヨーロッパに紹介した。

最後にフンボルトの広大な夢が実現されなかったアジア探検にかんしても、もしもフンボルトが和辻哲郎が名著『風土』(1935年)において風土の類型をモンスーン、砂漠と牧場地帯での探検を実行できていたならば、和辻と優るとも劣らない分析を残してくれたかもしれなかったことだろう。その意味で、フンボルトがガリオン船によるフィリピン行きを計画しながらも断念せざるをえなかった⁽²¹⁾のはその後の世界的見地から見て、まことに残念と言わざるをえない。

そのフンボルトについては和辻は『風土』では一度も言及していないが、後の『倫理学』においてはこう述べている。

「人間の地理学をはじめ科学的に形成したのは、ヘーゲルと同時代の人で、ヘーゲルよりも二十八年後まで生きたアレクサンダー・フォン・フンボルト(1769-1859)及びカール・リッター(1779-1859)である。このフンボルトは兄のウイヘルムとともに十九世紀初頭のドイツにおける最もすぐれた学者の一人で、有力な政治家でもあった兄ウイヘルムが文学や言語学の方面で大きな業績を残したのに対して、自然研究者として広汎な範囲にわたり大きい足跡を残した。が、特に注目すべきは、兄ウイヘルムとともにゲーテやシラーと親しく交わったフンボルトが、根本的な実験を重んずる特殊研究に努力するとともに、また全体的把握への強い衝動をもっていたことである。その点においてわれわれはヘルダー的な精神がこの着実な自然科学者のうちに生きつづけていたことを感ぜしめられる。実際彼の青年

時代の著作は、この時代の芸術家的・象徴的・思弁的な物の見方が彼をも捕えていたことを示しているのである。その彼を自然哲学に陥る危険から救ったのは、三十歳の年から六年にわたって試みたアメリカ旅行（1799-1804）であった。この旅行はこの後の学術探検旅行の模範となったものであるが、またフンボルト自身もこの旅行によって大学者にまで成熟したのである。この旅行の成果の発表にはほとんど二十年の歳月を要しており、その内容もきわめて多方面にわたっているのであるが、そのなかに風土的な人間の地理学がふくまれているのである。メキシコやキューバやヴェネズエラの地誌がそれであった。地理学的発見の時代の最も大きな発見地であったメキシコやペルーが、ここで人間の地理学のための最初の研究対象となったことは、決して偶然ではない。フンボルトの仕事は発見の時代にはじまった仕事の完成にはかならないのである⁽²²⁾。」

鋭い直感の持ち主だった和辻哲郎だけあって、赤道地方紀行においてフンボルトが成就した学術探検の成果を見事にまとめている。当時まだヨーロッパの学者が研究対象としていなかったメキシコやペルーでのフンボルトの調査を和辻が重視したのも注目に値する、といえよう。

とはいえ、フンボルトの多方面にわたる研究成果のなかに「風土的な人間の地理学がふくまれている」と和辻が指摘するのであれば、風土の三類型モンスーン、砂漠、牧場地域に関して自らが示した風土的な分析とフンボルトの見解と共通するものがあつたのか、あるいは全く別の視点からの彼の分析成果が和辻の関心をひいたのか等々を彼が具体的に指摘してくれなかったのを惜しむのはわたしだけであろうか。

というのもフンボルトの視点は和辻の風土的な地理学をはるかに越えて、南北アメリカと東アジア [=中国、日本] との交易の将来的可能性、さらにはふたつの大陸が急接近する世界史的な構想にまで及んでいるからである。フンボルトは指摘する。

「商業的見地からの考察に加えて、構想される海洋運河がもたらす結果について、若干の政治的観察も記しておこう。世界の交易が大きく変貌すれば、社会の組織もまた影響を受けずにいられないのが現代文明に状況である。南北両アメリカを結ぶ地峡を分断することに成功すれば、今は孤立して攻撃されえない東アジアも、不本意ながら、大西洋沿岸に居住するヨーロッパ系人種の諸民族とより密接な関係に入ることになるであろう。赤道海流が砕ける細長い大地こそは、長年にわたって中国と日本の独立を守ってきた防壁であったといえるかもしれない。遠い未来に思いを馳せれば、両世界に交易に開かれた新しい経路を独占的に利用しようとする願望から、強国間に紛争が生じることさえ想像される。君主制および共和制政府の節度に対する信頼も、知性の進歩や利益に関する正当な評価への期待も時として多少揺らぐことがあるから、このような私の危惧を払拭しえない。はるかな将来の政治的

出来事についてこれ以上は論じず、社会の幸福を願うわずかな人々の思念に胚胎しているにすぎないものを自画自賛して読者に語ることを控えるとしよう⁽²³⁾。」

その意味で、フンボルトがガリオン船によるフィリピン行きを最終的に断念せざるをえなかったのをわたしが惜しむのも同じ理由からなのである。(Tokyo, le 23 septembre 2006).

注

- (1) 『岩波哲学・思想辞典』(1998年刊)。p.1432.
- (2) 『新大陸赤道地方紀行』(全三巻2001-2003年刊)。大野英一郎・荒木善太訳。
- (3) Charles Minguet, *Alexandre de Humboldt historien et géographe de l'Amérique espagnole 1799-1804*. Nouvelle édition entièrement révisée et refondue. (Ed. L'Harmattan, 1997). pp.45-46.
- (4) 邦訳『新大陸赤道地方紀行』上巻。p.500.
- (5) Voltaire, *Essai sur les Mœurs*. 2 vol. Edition René Pomeau. t.I, pp.66.
- (6) ICHIKAWA Shin-ichi, "La Nueva España vista por los europeos—el caso de Alejandro de Humboldt y de Henri de Saussure," 早稲田大学地中海研究所編「地中海研究所紀要」第1号(2003)。pp.6-7. なお、百科全書派と奴隸制の問題については、市川慎一「百科全書派の奴隸制批判(ジョコールを中心として)」『百科全書派の世界』(世界書院、1995年刊)。pp.97-129.を参照されたい。
- (7) Voltaire, *Candide ou l'Optimisme*. Ed. Critique par Chrispher Thacker. (Droz, 1968). p.174. ここでは植田祐次訳『カンディード他五編』(岩波文庫、2005年刊)の訳文を借用した(pp.364-365).
- (8) Gilbert Chinard, "Le Mirage Américain", dans *Les Réfugiés Huguenots en Amérique*. (Les Belles-Lettres, 1925). p.X.
- (9) Gilbert Chinard, *L'Amérique et le Rêve exotique dans la Littérature française au XVIIe et au XVIIIe siècle*. (Droz, 1934). p.353.
- (10) ルソー著 / 本田喜代治・平岡昇訳『不平等起原論』(岩波文庫)。p.36.
- (11) 和辻哲郎全集第十一巻『倫理学下』(岩波書店、1962年刊) p.153. [早大戸山図書館 J121.6.2.11]。
- (12) 邦訳『新大陸赤道地方紀行』中巻。pp.484-485. / p.490.
- (13) Alexandre de Humboldt, *Voyages dans l'Amérique équinoxiale*. (François Maspero, 1980). 2 vol., t.I., p.49.
- (14) Cornélius de Pauw, *Recherches philosophiques sur les Américains*. (Berlin, 1770). t.I.,p.5. et pp.8-9.;t.II., pp.166-167.
- (15) Alexandre de Humboldt, *Voyages...*, t.II., p.95.
- (16) Charles Minguet, *Alexandre de Humboldt, historien et géographe de l'Amérique espagnole 1799-1804*. (François Maspero, 1969). p.67.;n.10.
- (17) ALEJANDRO DE HUMBOLDT / *Una nueva visión del mundo. / En conmemoración al Bicentenario de la llegada de Humboldt a México. 25 de septiembre 2003 - 25 de enero 2004*. Antiguo Colegio de San Ildefonso. [慶應義塾大学図書館 B295, 6 Hul 1]。
- (18) Frank Holl, "Redescubriendo a Alejandro de Humboldt" (pp.29-36) y Jaime Labastido, "Humboldt: Su Concepto de Mundo". (pp.39-45).
- (19) Diderot, *Pensées sur l'Interprétation de la Nature*. dans *Œuvres complètes*. (Club Français du Livre, 1969)., t.II., pp.768-769.
- (20) 邦訳『新大陸赤道地方紀行』中巻。p.27.

- (21) 同下巻 p.195にフンボルトはこのように書いている。「あまりにも知られていないフィリピン列島のためには [ペルーのアンデス山脈をあきらめて、ヌエバ・エスパニャに一年間滞在してから、ガレオン船に乗ってアカブルコからマニラに渡り、バスラとアレポを経由してヨーロッパに戻る、当初の計画に固執したのである。]
- (22) 和辻哲郎全集第十一巻『倫理学下』。p.141.
- (23) 邦訳『新大陸赤道地方紀行』下巻。p.311.

〔付記〕人文地理学の観点からフンボルトの業績を扱った研究書に西川治氏の二書がある。『人文地理学入門—思想史的考察—』（東京大学出版会、1985年刊）と同『地球時代の地理思想—フンボルト精神の展開—』（古今書院、1988年刊行）。

前者には「啓蒙思想における風土論」と題された章があるが、フランス啓蒙思想家とフンボルトとの関係についてはモンテスキュー『法の精神』とヴォルテール『諸民族の風習と精神論[マ]』に言及されているだけである（同書 pp.23-24）。

なお、後者において、フンボルトが中央アジアの探険旅行を計画しながらも果たせなかった理由として氏は次のように推測されている。

「その理由は察するところ、フンボルトがフランス革命に好意的であったこと、また南アメリカにおけるスペイン支配体制に厳しい批判をなしたこと、その眼が今度はインドの植民政策へも向けられることを、イギリス政府の要人たちが恐れたからであろう（同書 p.27）。」これはわたしにとっては想定外の指摘であるので、わたしの「結語」とあわせ、読者が参考にされるよう望んでおきたい。（Tokyo, le 16 novembre 2006）。